

津波浸水の早期発信へ



概要

このほど「千葉県津波浸水予測システム」が稼働しました。同システムは、防災科学技術研究所が敷設した、地震計・水圧計を一体とした観測装置から海底ケーブルを通して観測データを受信し、それをもとに津波や浸水を予測するものです。このシステムにより、日本海溝付近で発生した地震をこれまでより約30秒早くキャッチし、津波を約20分早く検知することができます。

現在、検知した情報を千葉県が、直接沿岸市町村に発信できるよう、気象庁との協議を進めています。

取り組み

2011年3月11日の東日本大震災は1万8703人の死者、2674人の行方不明者を出すという甚大な被害をもたらしました。千葉県においても18市町村が津波による浸水被害を受け、14人の尊い命が奪われました。東日本大震災の震源域は、480kmの長さに及びましたが、房総沖の地殻は動いていませんでした。その一方で、三陸沖には設置されている海底観測網が房総沖にはないことから、2011年6月議会において、わが会派は観測網の整備を訴えました。

その後、2013年から防災科学技術研究所の海底ケーブルの敷設が始まり、1年半かけて「日本海溝海底地震津波観測網(S-net)」が整備されました。

千葉県は、この観測網を利用した津波浸水システムの整備事業を2018年から開始し、今日に至っています。現在、千葉県として観測データの活用はできるものの、沿岸市町村への予報業務はまだ許可されていません。一日も早い全面稼働へ向けてさらなる取り組みを続けてまいります。